あとがき
―蒜山地質の 30 年間を振り返って―

株式会社蒜山地質年代学研究所
代表取締役　竹下 浩征

「蒜山地質年代学研究所（以下，蒜山地質とする）は10年経ったら業界に認知され，20年でその存在は一般にも知られ，30年で伝説となる」．これは，私が会社を受け継いだ頃に近しい人に吹聴していた言葉です．20年後と30年後の間にかなりの飛躍がありますが，そこには，自分が引退するであろう30年後，会社はすでに一部上場企業に成り上がっていて，私は富裕層の仲間入りをしていて悠々自適の生活をしているはずだ，というとんでもなくおバカな夢と願望が込められていました．果たしてその結果は？皆さんがご存じの通り，蒜山地質の株式は未公開のままですし，私も富裕層とは縁のない生活をしています．

30年後に伝説となるという夢と願望は叶えられなかったものの，蒜山地質という小さな会社がここまで続けてこられたのは，やはり研究することも忘れなかったからだと思っています．私が考える蒜山地質の完成形は，自分たちで稼いだお金で何者にも縛られずに研究も続けられる会社となることです．そのことを決意として記録するために，蒜山地質を法人化する時，定款の事業目的の中に「研究」を加えました．定款の作成と法人登記を代行していただいた司法書士（長崎計二先生；本特集号の竹下ほかを参照）は，研究活動で利益が出せるとは思えないので，事業の目的として法務局が認めるかな？可能性は低いけど，今までこんな会社は無かったし，面白いからやってみますかと言って申請していただきました．結果は見事に「受理」でした．蒜山地質の定款には，「地質を対象とする岩石・構造・年代・層序・地球化学等の学術研究」と「地質学に関する研究および教育を扱う雑誌の出版」がその目的欄に記載されました．社員皆が研究をしながら利益を出せるような会社となるには未だ道半ばですが，そこへ至る種はすでに蒔かれていて，芽も出ています．あとは，それをどのように育てるかですが，それは次の世代にお任せしようと思います．私は過ぎ去った事柄をできるだけ正確に記録して公開することで，これからの皆さんが蒜山地質と地質学と年代学のあるべき姿を考えるお手伝いをしていきたいと思います．

図１　創立１年後に入居したテナントにて．右奥が初代社長の岡田，左手前が竹下．

ここでは，蒜山地質の30年間を振り返り，過去2回の創立記念特集（竹下，2006；八木，2015）では伝えきれなかった創業のきっかけと社名の由来を更新します．また，20周年記念特集の発行後に取り組んだ研究活動について記述し，30年間で最も記憶に残っているある出来事についても触れておきます．

創業のきっかけと始まりの頃

蒜山地質は今から30年前，博士号を取得したばかりの二人の研究生によって岡山市で創業されました．その二人とは，初代代表の岡田利典と2代目代表となる私（竹下浩征）でした．創業前夜のことは創立10周年記念特集でも詳述していますので，興味のある方は竹下（2006）をご参照ください．蒜山地質のホームページでそのPDF（https://geohiruzen.co.jp/wordpress/egj00/egj00_01.pdf）をダウンロードできます．

創業のきっかけは，1994年の晩秋か初冬だったと記憶していますが，二人の恩師である岡山理科大学の板谷徹丸教授（当時）の提案でした（板谷，2015）．「二人で年代測定を仕事としてやってみないか」．その言葉を聞いて，大学等の研究職以外で自分の得意分野を続けられると気づいた岡田は粛々と開業の準備を始めました．その頃の私は研究職への道を模索していたため，いわゆる民間企業への就活はせず，温泉開発を目的とする地質調査などを請け負って生活費を稼いでいました．私は研究職へ就職するまでの1年間の期限付きで，岡田が準備を進めている年代測定の会社に参加することにしました．その時なぜ1年で研究職へ就けると思ったのか？今となっては本人にも謎ですが，何事も想えば実現すると呑気に考えていた年頃だったのでしょう．そうして始まったのが，岡田社長の下，私を唯一の従業員とする個人自営の蒜山地質でした．

地質と年代を扱う蒜山地質の営業種目は，岡田と私が大学と大学院で学んできた地質調査，化学分析および年代測定としました．データの提供先は大学等の研究機関と研究者および建設コンサルタント企業です．当時は，理学という基礎学問の一つにすぎない地質学と年代学だけでどうやって利益を生み出してビジネスとして成立させるのか？周囲からは否定的な目で見られていました．地質系の多くの企業も，残念ながら，地質だけでは利益を上げることはできないと考えていることも知りました．基礎学問は金にならないという訳です．確かにその通りではあるのですが，

創業してしまった二人にとっては他にできることがないのだから，とにかくやるしか無かったのです．利益が得られないようなら，給与を減らして利益を確保して，次の仕事に備えるしか無かったのです．50万円ほどの売り上げがあった最初の月の初任給は，翌月の必要経費を確保した残りの5万円でした．今から思えば，岡田も私も若くて，就業経験が無かったことが幸いしました．わずかな給与でしたが，アルバイトで得たものとは違う感慨がありました．しかし，その大切な初任給を，何ということか，私はパチスロであっという間に使い果たしてしまうのです．これについては個人のプライバシーに当たるので詳細は控えさせていただきます．

齢30年の会社

ところで，蒜山地質と同じように，創業30年を超える会社は日本に何社ぐらいあるのでしょうか？会社の9割は10年持たないと，何かで読んだ記憶があるので，30年だと超希少ではないかと思い調べてみました．全国には法人約207万社，個人経営約162万社の合計約368万もの会社がありました（総務省統計局，2023）．そのうち，法人約157万社の平均年齢は34.1年で，2021年に倒産した会社の平均寿命は23.8年でした（東京商工リサーチ，2022）．これは朗報です．年数だけを見れば，蒜山地質は平均年齢以下の中堅クラスの会社ではあるものの，倒産した会社の寿命は超えているのです．そうであれば，蒜山地質はもはや簡単には潰れないということではないですか．これからさらに長生きできるとすれば何歳まで生きられるのか？それは会社を構成する社員の考え方次第ではありますが，世の中には面白い統計データが公表されています．全国の会社の生存率です．創業から20年以上50年未満生存する会社の割合は約55％あって，ちょうど30年続いた会社は43％もあるそうです（M&A Capital Partners，2023）．これは数にすると法人だけで110万社以上にもなります．想像した以上に多くの会社が30年を迎えることができるのです．ちなみに，100年以上生存している会社となるとグッと数が減って全国に4万5,284社，200年以上の会社だと桁が減って1,813社，300年以上が889社，500年以上が47社あるらしく，さらに1,000年以上続いている会社となるとわずかに11社になるそうです（帝国データバンク，2024）．これこそまさに神話レベルの会社です．蒜山地質がそれらの神話的老舗に並ぶためには，少なくともあと970年以上も継続していかなければなりません．さすがにそれだけ長い時間となると，あの鬼舞辻無惨でもない限り，何十代もの代替わりが必要になります．

図２　テナントの駐車場入り口に掲げられた社名看板

今さらですが，社名の由来とは

1995年の1月，岡田は自腹の5万円で社印と代表者印を作り，板谷先生の協力を得ながら年代測定を受注し始めました．阪神淡路大震災の起こる数日前のことでした．社名は「蒜山地質年代学研究所」としました．さて，ここで読者の皆さんに質問です．なぜ，蒜山地質は岡山市で創業されたのに「蒜山」という岡山県北部の山の名が冠されたのでしょうか？この質問は，仕事を始めてからこれまでに，さまざまな取引先の方から質問され続けてきました．あまりにもよく聞かれるので，心に余裕のない時は「蒜山という山が好きだから」とか「所在地のある岡山県を象徴するものは何かと考えて」とか「蒜山が日本の始まりの地だから」と適当なことを言ったりしていました．これらの説明を聞かされたすべての皆さんに謝罪します．本当は，岡田と私が会社の名称を考えている時に，板谷先生から「蒜山研究所」の名前を残してはどうか？と提案されたからです．蒜山地質の創業前，岡山理科大学の板谷研究室は，大学の附属研究所である自然科学研究所に所属していました．自然科学研究所の前身は「蒜山研究所」といい，板谷先生はその所属名で膨大な数のK–Ar年代関連の論文を発表されていました．当時，地質学関連の研究者の多くは「蒜山研究所≒板谷研究室＝K–Ar年代測定の拠点」と認識していたのです．それが大学の都合で改組され，名称を変えられてしまったため，板谷先生はどこかで名前を残したいと思われていたようでした．本人は軽い気持ちで言ったのではないかと推察しますが，しかし，弟子の二人にとっては重大事です．会社の名前に蒜山研究所を入れることは決まってしまいました．弟子の二人が抗えたのは，大学の研究所と違う組織であることが分かるように，蒜山と研究所の間に何かを加えることでした．しかしこれも板谷先生の一言で決まってしまったのです．「社名は，何をやっているかが分かるようにした方が良い」．しかり，地質と年代を扱う会社なのだから，間に入れるものは自明です．この時，当時の岡山理科大学の事務にダメ元で蒜山研究所という名称を使用して良いかと尋ねてみました．断られるだろうなあ，断ってくれ，と祈っていたら，「卒業生が使用するなら何も問題ない．ぜひ使って」と二つ返事でOKが出てしまいました．個人的には，蒜山って電話では伝え難いな，由来を説明するのが面倒だなあ，できればカタカナのカッコいい社名が良かったな，と思っていましたが，今では取引先のどなたもが「ひるぜんさん」と愛情を込めて呼んでくださいます．読み難いけど，一度聞いたら記憶に残りやすいので，結果として，これより適した社名は無かったの

だと，今はその名にとても愛着を感じています．

30年後の今へ

創業30周年を記念した特集号を編集している私の脳裏には，30年間に起こったさまざまなことが，まるで走馬灯のように浮かんでは消えていきます．会社を手伝うのは1年間だけと言っていた私は現在まで途切れることなく勤続し，岡田は8年ほどで自分が立ち上げた会社を去っていきました．30年の間に，自営の蒜山地質は株式会社となり，事務所は自宅からテナントへ，そして自社所有のものへ移り変わっていきました．志を同じくする仲間が増えれば，逆に離れていく者もありました．人も売り上げも増減を繰り返しながら，まさに一歩進んで二歩下がるという，かつての流行歌のような歩みが続きました．現在，技術系社員は非常勤も合わせると12人になりました．業務内容は7種目に拡大し，20を超える手法を扱えるまでに成長しました．一方，30年間で退職した技術系社員は22人に上ります．平均すると毎年1人が入社し，実にその6割以上が会社から離れていった訳です．もしかしてブラックな会社なのでしょうか？何十年も働いてくれている古参もいるので，そんなことはないと思うのですが…．退職された方の理由はもちろんさまざまです．縁が無くなった方もいますが，大学の研究者となった方，実家の家業を継いだ方，独立して会社を立ち上げた方々とは現在も仕事を共にする関係を保っています．

ブラックと言えば，かつて，阪神淡路大震災の翌年に受注した活断層調査を思い出します．そのまとめの作業で，協力会社の事務所に2週間も缶詰にされて1日15時間以上働き，毎晩24時過ぎてから居酒屋で夕食を取り，ホテルの部屋に帰ってまさに泥のように眠り込んだ日々．今では懐かしい思い出です．技術士のいない博士だけの会社では入札に参加できないことを知った時はとても強い憤りを感じました（竹下，2015）．小泉政権の頃，公共事業費が大幅に削減され，地質関連企業の倒産が相次ぎ，蒜山地質も崩壊の一歩手前まで至ったこともありました．会社社屋の購入を検討した時に，その担保のために，会社と別に，個人の借金をして家を新築したこともありました．もう少しお金を貯めてから蔵のある家を建てたかったのですが，今から思えばそんな見栄を張る時間的な余裕がなかったのが幸いでした．小さくても，大切な家族の「都」を建てることができた良いきっかけでした．都と言えば，関西の経済圏内で営業したくて奈良に分室を，神戸に支店を構えたのですが，いずれも10年を待たずに閉鎖することになり，長続きしませんでした．支店の閉鎖を検討していた頃，岡山本社の隣にあった商社が移転することになり，その土地と建物が売りに出されました．隣の土地は借金してでも買え！という諺があります．私は，事業と人員の拡張に備えるために，メインバンクのおかやま信用金庫の力を借りて，2015年の春に，その土地と建物を購入しました．そこは改装後，蒜山地質の研究活動の拠点となるように，地質技術センターと名付けました．

研究の方は，創業から細々と主に社員の個人研究を行ってきましたが，2005年から会社の事業として本格的に取り組みました．社名に研究所と銘打ったのだから研究してこそ存在価値があると思ってはいたものの，実際に研究に投資できた額は微々たるものでした．まず取り組んだのは，営業も兼ねた日本地質学会での企業展示でした．2004年に千葉大学で開催された第111年学術大会に八木公史が視察を兼ねて参加し，翌2005年の京都大学で開催された第112年学術大会から本格的に企業ブースを出展しました．私個人としては約10年ぶりの地質学会への参加でした．その時，久しぶりに再会した平島崇男さんから「よく帰ってきた！」と言われ，握手を求められた時はとても感激しました．あゝ，やはり研究者の集まる場はいいな，懐かしく，それでいて新鮮で，刺激になるし，とても心地良い．その時から蒜山地質はほぼ毎年地質学会に出展し，研究発表も行ってきました．

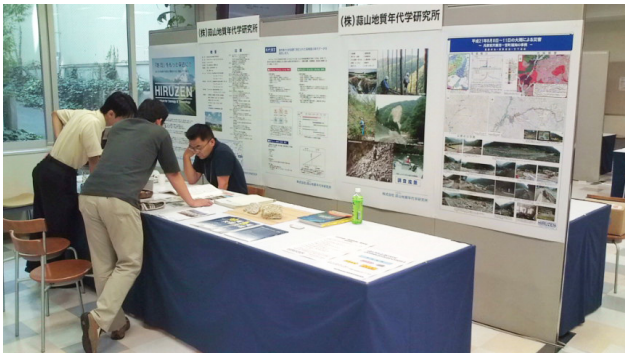

図３　2009 年の日本地質学会学術大会（於：岡山理科大学）の企業ブースにて

2006年になると，研究報告誌「地質技術」を創刊し，創刊準備号（no.0）を発行しました．蒜山地質の活動に協力していただいている大学研究者や建設コンサルタントの技術者の方々に論文を寄稿していただき，当時の社員全員も個人研究や趣味の事柄などを読み物として投稿しました．編集作業は当時の岡山本社の社員が約半年間にわたって通常業務と兼務して行ったのですが，その疲労度は尋常ではなく，翌年に発行する予定だった創刊号が完成したのは，実に5年後の2011年でした．5年の間に編集委員会を更新し，編集規約と編集フローを整えて，印刷会社も地質学に興味を持っていて，担当者による校閲がしっかりしている会社（株式会社中野コロタイプ：本社岡山市）に変更しました．そして2025年，準備号から数えて16冊目と17冊目になる第15号（蒜山地質創立30周年記念特集号）のパート1を9月に，パート2を10月に刊行しました．

地質学会への参加と地質技術の編集・発行を10年ほど続けた時，このペースでは私が生きているうちに本当の研究所には成り上がりそうもないことを自覚しました．どうしようか，と悲嘆しかけていた時に，一条の救いの光が見えました．地球年代学に携わる研究者と技術者をつなぎ，個人や一企業では解決できないさまざまな課題を協働して解決することを目的とした，研究型NPO法人をつくる機会が訪れたのです．その設立前夜については板谷（2015）に詳しく記されているのでそちらを参照ください．私は，

会社の将来をそのNPO法人地球年代学ネットワークに託すことを考えました．また，同時に蒜山地質の内部に研究開発を専門とする部署を設置し，いつでもNPO法人に合流できる体制を整えようとしました．2016年，蒜山地質の創業20周年のお祝いを行った翌年に，調査分析技術の開発や学術研究を推進することを目的とした「地質技術センター（研究機関番号95302)」を正式に開設しました．初代センター長は板谷先生に引き受けていただきました．NPO法人は，その後，赤磐市と教育・研究の連携協定を締結し，市内の廃校を「地球史研究所」として再利用し，研究と普及活動を行ってきました．最近はかなり市民にも認知され，随分と活動しやすくなってきたと感じています．一方，地質技術センターでは当初想定した科研費を獲得することができず，低空飛行が続いています．センターの設立10年となる来年度には，NPO法人との合流を考えた大きなテコ入れが必要だと考えています．

おわりに

私には，2017年の3月のあの日から後悔し続けていることがあります．中国の温泉調査で大切な友人が拘束されてしまったことです．中国の企業から依頼された調査に従事していただけで，スパイ扱いされた日本人が拘束されてしまったあの事件です．この事件には未だに拘束され続けている「被害者」がいて，そのご家族がいます．私が自分の思いだけでここに詳細を記すことはできませんが，彼は潔白です．私は，彼とオーストラリアで初めて出会ってから30年以上も一緒に仕事をしてきました．中国では最初，日本の企業の現地責任者として赴任し，後に，中国の法律に則って現地で温泉開発のコンサルタント会社を起業し，主に地方政府の依頼を請けてきました．中国の経済発展の一助となるために誠実に働いてきたのに，ある日突然，彼の好意は否定され，自由を奪われたのです．無罪だから，潔白だから，彼は裁判でも罪を認めませんでした．その結果，あれから8年経った今もまだ帰国できないでいます．私はあの日から1日たりとも彼のことを思い出さなかった日はありません．この小文をお読みの地質学を生業としている皆さんにお願いがあります．同じ地質屋として，地質調査をしたことで自由を奪われたものがいることを忘れないでください．これは過去のことではなく，現在進行中の地質屋に対する最大限の不条理です．彼が一日も早く解放されて帰国することを祈っていただくことを願います．

蒜山地質はこれまでにいくつもの危機や大きな壁にぶつかりながら，その度に恩師や多くの先輩諸氏の力強い協力と社員の献身的な支えによって乗り越えてきました．何を行うにしても，1回の取り組みで物事が解決するような奇跡は起こりませんでした．蒜山地質を創業した時，法人化した時，研究を再開すると決めた時，そしてNPO法人の設立に参画し，そこへ会社ごと合流すると決めた時，それぞれに試行錯誤と軌道修正を繰り返しながら，少しずつ前進してきました．その行動の根元にあるのは，地質学に関するあらゆる研究を自由にできる会社を創り上げるという私の個人的な想いです．そして，その完成形を夢見て，10年後，20年後，30年後に何をやるべきかを考え続け，多くの方のご協力の下で実行してきました．蒜山地質は，おそらくこれからもさまざまな不条理に襲われ，危機に瀕し，壁に立ち塞がれることでしょう．私たちは可能な限り自助の努力によってそれらを乗り越えようとしますが，万が一にも力及ばずと見えましたら，これまで以上に皆さんの力をお貸しください．蒜山地質はいただいた恩を必ずお返しいたします．「情けは人の為ならず」，これは私の座右の銘であり，30年間，常にそれができているかを自問してきた言葉です．今後とも皆様のご指導とご鞭撻を賜りますよう，改めてお願い申し上げます．

図４　蒜山地質の社屋（2025 年 9 月現在）

引用文献

板谷徹丸（2015）地球年代学ネットワーク（NPO 法人）．地質技術 no.5，133–140.

M&A Capital Partners（2023）企業生存率とは？企業が 10 年生き残る確率や生存率を高めるポイント． https://www.ma-cp.com/about-ma/business-survival-ratio/. 2023/12/27.

総務省統計局（2023）我が国の事業所・企業の経済活動の状況 〜令和 3 年経済センサス – 活動調査の結果から 〜．統計 Today no.195．https://www.stat.go.jp/info/today/pdf/195.pdf.

竹下浩征（2006）蒜山地質年代学研究所 10 年間のあゆみ．地質技術創刊準備号 no.0，1–8.

竹下浩征（2015）技術士 5 点で，博士は零点？ 地質技術 no.5，157–163.

東京商工リサーチ（2022）TSR データインサイト：全国 157 万社の “ 平均年齢（業歴）” は 34.1 年 最長は製造業の 42.1 年、最短は情報通信業の 23.1 年 〜 2021 年「企業の平均年齢」調査 〜． https://www.tsr-net.co.jp/data/detail/1191491_1527.html． 2022/09/22.

帝国データバンク（2024）レポート 全国「老舗企業」分析調査（2024 年）．https://www.tdb.co.jp/report/economic/20241024_shinise2024/. 2024/10/24.

八木公史（2015）蒜山地質年代学研究所のあゆみ — 2nd ディケイド —．地質技術 no.5，77–78.

2025年10月11日